日本統治時期から現在までの台北市青田街における日式住宅の変容過程

A STUDY ON THE TRANSFORMATION OF JAPANESE-STYLE HOUSES ON QING-TIAN STREET IN TAIWAN SINCE JAPANESE COLONIAL PERIOD

-A study on the transformation of the living space of Japanese-style houses in Taiwan-

郭 雅豊*，高田光雄**，清水貴史***
Yawen KUO, Mitsuo TAKADA and Takafumi SHIMIZU

In this study, focusing on the Japanese style houses which were constructed as owned house on Qing-Tian street in Japanese colonial period, the interview for the Japanese who had lived there in the period and the Taiwanese residents who are living in the houses was conducted. In addition the more the additional interview and measurement to confirm the consideration by them were conducted and the transformation of these houses are analyzed from Japanese colonial period to present. These houses were constructed as Japanese permanent house. After World War II Taiwanese residents stay living in these houses and maintaining these characteristics in their earliest days although extension and remodel were conducted. Some of extensions and remodels are not fit Taiwanese resident's life style. However these characteristics are consciously maintained by them. That is, although these Japanese-style houses on Qing-Tian street which was apart from Japanese residents, It becomes clear that Taiwanese residents have been living in them with consciously conservation.

Keywords: Japanese Colonial Period, Japanese Style House, Taiwan, Showa Cho, Qing Tian Street, Transformation

日本統治時期，日式住宅，台灣，昭和町，青田街，變容過程

1 研究の背景と目的

近年，台北市青田街の日式住宅は，歴史・文化的価値があると評価されつつあるが，これまで詳細な調査がなされたことはなく，今後，これらの建築物を維持，補修，保存するとしても，建設の歴史的背景と当時の居住状況を明らかにするとともに，日治時期から現在かけてどのように住み続けられてきたかを解明する必要がある。

本研究は，現台北市青田街に立地，日治時期に建造された昭和町の持家を対象として，その住家が建造された昭和29年（昭和4年）頃からの日本人居住者による居住状況，さらに戦後より住み続けてきた台湾籍住民による居住状況を含め，一連の居住空間の変容過程を明らかにすることを目的としている。

本研究に関連し，これまでに日治時期以降から現在までの台北籍の住人の使用状況と増改築の内容について調査・考察し1），さらに，建設当初から日治時期の間に，この住宅に実際に居住していた日本人にインタビュー調査などの協力を得て，青田街（昭和町の持家地域2）の形成，持家を建造するに至る動機，それぞれの建物の原形と各戸の居住状況が明らかとなっている3）。それらの結果から，本研究の目的である，台北市青田街の日式住宅の居住空間の変容過程を明らかにしている。

2 研究の方法と調査対象

本研究では，居住空間の変容過程の全体像を明らかにするため，前報で調査した結果を建設当初から，現在に至るまでの日本人・台湾籍住民居住者双方の居住状況に着目してまとめた。その結果，分かったことをさらに検証・確認するため，追加調査を行った5），これにより，一連の作業により，日治時期・日治時期以降の二つの時期を把握することなくしては分からない点を解明することができ，成果を一層高めることができた。調査対象としては，現在，建設当初の居住状況，さらに現在の居住状況も含む8戸の事例を取り上げている。8戸の現居住者の入居時期は，40年代3戸（事例1～3，表1），50年代1戸（事例4），60年代3戸（事例5～7），90年代1戸（事例8）である。居住者が入れ替わったことのない事例は1～4で，1度または2度入れ替わった事例は事例5，6，7と事例8である。

3 昭和町の個人住宅から青田街の台湾大学の宿舍への転用

建設当初，建築主の大半が台北帝国大学などの教員や，総督府，台湾電力などの幹部で占められていた。従って，青田町の日式住宅地は，多くの建築者が退官するまで台湾で生活することを，永住することを前提にして住宅を建設した。そのため，検査造るなど建物の瓦が重視され，台湾の温暖湿潤で台風が多いという環境への対策も取られた住宅地であった5）。

終戦後，昭和町においてこれらの持家地域の土地と建物は中華民国に接収され，新たに「青田街」と命名された。さらに管理者が新制台湾大学（旧台北帝国大学）へと移った結果，現在まで台湾大学の新任教員宿舎として利用されてきた。これらの住民に住み続けた当時の住民の教員らは，台湾では知識層で，医学や農学などの学問資産がある人々であり，さらに日本に留学した経験を持つ場合もあり，日本に関する情報などを知り得る立場にあった人々である5）。現在，青田町の日式住宅は借家に分譲されるが，1983年5月までに入居した居住者は退官後も終身住み続けられること持家に近い状況であり，
自費による増築改も自由に認められている[14]。

4 各事例による建設当初から現在までの居住空間の変容
4-1 事例1
事例1では、建設当初、建築主夫婦とその子供3人、加えて女中が住んでおり、玄関、応接間、食堂、書斎、座敷、客間、納戸、女中室、台所、風呂場、トイレ、縁側が設けられた建物であった。居室空間[15]には、応接間、食堂、書斎、子供部屋（旧納戸）は板の間で、イス座する洋室があった。

1946年、現居住者である家主とその従姉が入居し、その後、日本人の妻と4人の子供が同居した。その際、応接間を客畳[16]、食堂を書斎、書斎を書斎、書斎を座敷、座敷を廁と子供の寝室である主畳、客間を食堂、女中室を書斎として使用した。

応接間は玄関に近く、10畳の広さがあったことから、客畳として使用されている。食堂は、板張りで台所の近くにあったこともあり、現在[17]は同じ用途の書斎として使用されている。書斎には、作り込む木が高欄の一部に収納できる木箱が重ねられており、現居住者も家主家の書斎として使った。しかし、1995年に改築された後の建物となくなったこともあり、応接間との間にあった開け戸を無にして改修した。同時に、応接間と食堂の間にあった引き戸が使わなくなったため、開け戸に変更された。

建築の奥にある座敷と客間では、現居住者が入居後も座敷は座敷、収納に布団を収納していた。1980年には居住人数が減ったため、座敷を他人に賃貸し、その際、押入れの戸の位置が変更された。しかしこの後、次男の寝室兼書房となり、押入れの戸は元の位置に戻された。その際、押入れの上段は窓として利用されていた。また、2002年、座敷および書房の都築が撤去され、二世組合住宅の次男の寝室兼書房となった。さらに客間の床材が、フローリングに変更され、縁側へ出るための外開戸も内開戸に変更された。

建設当初の納戸は、1939年子供の居室内が必要となった際に子供部屋へと変えられ、1940年には、子供部屋に設けられたのご吊りベッドは2段ベッドに変えられた。その後、ベランジの東側には長男の寝室兼勉強部屋が増築され、子供部屋は長女の寝室となった。現居住者入居後、この子供部屋は家主の従姉の居室内として使われた。1965年からは従姉さんが独立したが、彼女を看護人として命取り扱うという考え[18]もあり、書斎があった位置に、別棟で居室内に並んだ書房を自費で増築して移った。同年、ベランジに壁をつくり、長女の書房を造った。現居住者はこの居のある寝室兼勉強部屋を父親が同じ時期に増築していたと思っていたが、建設当初の日本人居住者に対するインタビューで、実際には、日治時代に既に増築されていたことが明らかになった。

一方、1990年前後に、居住人数が減ったため、建物の一部に復元しようと考え、現居住者入居後に増築された書房と、日治時代に増築された寝室兼勉強部屋を撤去した。また、応接間の窓が破損したため、建設当初の窓の模様に従って新しいものを造った。1982年頃には、従姉の長男が独立したため、65年に増築された建物を取り替え、同じく別棟の新たな長男の自宅を増築した。

4-2 事例2
事例2では、建築当初、建築主夫婦と子供4人が居住しており、玄関、応接間、座敷、次の間、書斎、書房、居間、脱衣室、台所、風呂場、トイレ、縁側が設けられた建物であった。居室空間には、応接間は板の間の洋室があり、その以外の部屋は全て板張りで、床座をしていた。

1947年、現居住者である家主とその家族6人、女中2人が入居した。その際、応接間を客畳、書斎を書斎、書斎を座敷、次の間を次男・三男の寝室、東側と西側の居間を長男と長女の寝室、脱衣室を男用室として使用した。部屋は一室一用室としたため、部屋が不足し、庭にあった物置を四男の寝室として改築した。1954年、家主は静かな環境を求めて、離れる書斎を増築した。60年後に、防犯性を向上させるため、引き戸である玄関の戸の外側に鉄製の外開戸を付け加えた。入居当初は、建物の前の茶の間、書斎でもイス座で生活していたが、それ以外の部屋の部屋床は床座し、晩の上で直接就寝していた。1995年からは西側に増築された別棟の建物へ居を移し、部屋は居住しなくなったが、建物は家主と建設当初の形で残そうという努力は続けられ、現在も、全室に戸が設けられており、普段は掃除行っているようである。

部屋は来客用であったため、家主は最初使わなかったが、現居住者入居後は、居間を寝室として使用された。1960年には、部屋で部屋が不足するようになったが、家主夫妻は居間の形を残さないように、その横に別棟のレジデンスの寝室、居間兼家具庫兼楽の起居室と家主の書房を増築し、移った。しかし、食事や入浴は、部屋で、トイレには、1954年に部屋のトイレが増築された出て入りを利用した。増築された建物では居間が一列に配置され、床はタイル張りであるため、軒をはぎき、スツールに座り替え、イス座で生活している。この頃には、部屋に座敷の畳の上にソファーが、床にテレビが置かれ座敷となった。

応接間は一番広い部屋であり、しかも唯一の板の間で家具も置きやすいので、現居住者が入居した頃には、客畳として使用されていた。60年代、この部屋は床の寝室兼勉強部屋の子供用として使用されたこともあったが、それは、4人子供のベッドや勉強机などの家具を置くことが理由であった。85年になると、居住人数が減り、この応接間は再度客畳として使われ始めた。その頃から、居間に入って正面にある座敷は、起居室となった。

部屋の間は、建設当初から台所の間にハッチ・カウンターの付いた作り付けの食器棚が設置されていた。その利便性もあり、台所の隣に配置されていた他の間は食事室として使用され続けていた。書斎においても、当初から天井までの作り付けの木箱が設けられており、それを利用できるので、家主の書房として使用されたことがある。

長男が結婚した1985年には、部屋の横に先に増築されていた家主夫婦の建物と隣接して、長男夫妻のための建物が増築され、玄関、食事、食堂、浴室が二つ、寝室が二つ一列に並べて設けられた。

4-3 事例3
事例3の建築主は、1929年から3年間この家に居住していたが、その後、病気により亡くなった[19]。1931年からは、同大学の教授とその家族6人、女中2人がこの建物に入居した[20]。この建物には玄関、台所、風呂場、トイレ、縁側があり、板の間の部屋が二つ、昼飯を部屋が五つあった。入居当初は、板の間を応接間や書斎、10畳部屋を座敷、8畳部屋を居間、6畳部屋を書斎の間、4.5畳部屋を母の部屋、3畳部屋を女中座として使用していた。

1948年現居住者の家主とその家族4人、女中が入居し、その後、
子供が4人増えた。住み始めた当初、応接間を書斎、書斎を書房、座敷を主臥室、間接を子供房、茶の間を食事、母の部屋を客房、女中室を僕人室として使用した。その際、茶の間以外の敷地のアパートは、床屋をしていた。63年に、発症性を恐れたため、玄関の引戸の扉の屋を内庭戸に替え、外側に紙製の外戸に付け加えた。現居住者は玄関の扉は建設当初から外戸に改められており、日本人住民に対するインパクトで、実際には日治期には引き戸であったことが分かりた。

座敷は来客用として使用され、夜には建築主の寝室となり、現在住居者住居後、家主夫妻は幼い子供と一緒に寝るため、一番広いこの座敷を主臥室として使用した。近くで子供の学習も利用できるため、隣にいる居間を子供房として使用した。応接間は来客を入れる場所であったが、普段は建築主の書斎としても使用され、その向きにある書斎は子供の勉強部屋兼客室であったが、現居住者入居後、応接間は玄関に近く、板の間で10畳の広さがあったことから、客間として使用された。玄関から離れていた方が静かな環境を保つため、元からの中央に書斎を家の主屋に使用した。

1970年頃には、子供が成長し新築が必要になったが、新築をたたぐため、取引し経済の対策方針も変わり、旧の玄関、正面付の庭の背後にある山側に、書斎は主臥室、応接間を客房とした。さらに、必要に応じて大きく改築された部分もあった。

まず、玄関部が主軸の床材をフローリングに変更し、イズ屋の床面を変えた。これにより、客間が作る新築が見えなくなったり、大学からの誌が比較的明るい。1980年代、筑紫の部屋を維持する事が難しくなったことも理由である。さらに、居間である台所と食堂である茶の間は少し離れしており、不便に感じていたため、隣接する客室に、台所を食堂に改築した。その際、義の間の三畳の寝室は、用水を引く戸に、引戸を間仕切りにした。また、隣にある4.5畳の部屋は当初、全室の客室であったが、この時期には、次女の室の寝室となり、その広さだけではベッドなどの家具を置くスペースがなかったため、廊下まで敷設し、中庭は完全に寝室の一部となった。

1975年、起居室を広く使うため、二つ引戸を撤去し、起居室と書斎を一室にした。さらに、縁側の一部は客間と起居室の延長として使われた。2001年からは団子屋の替わりに、家主夫妻も近くにあるマリンクラブに引換えたが、この建物を維持するため、住み込みの清掃作業が行われ、週2回掃除されている。この事例の室内は必要に応じて改築されたが、増築された部分は殆どなく、外観はよく保全されている。
### 表

<table>
<thead>
<tr>
<th>1920</th>
<th>1940</th>
<th>1950</th>
<th>1960</th>
</tr>
</thead>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>日本建築専門</th>
<th>日本建築専門</th>
<th>日本建築専門</th>
<th>日本建築専門</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>日本建築専門</th>
<th>日本建築専門</th>
<th>日本建築専門</th>
<th>日本建築専門</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>日本建築専門</th>
<th>日本建築専門</th>
<th>日本建築専門</th>
<th>日本建築専門</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>日本建築専門</th>
<th>日本建築専門</th>
<th>日本建築専門</th>
<th>日本建築専門</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>日本建築専門</th>
<th>日本建築専門</th>
<th>日本建築専門</th>
<th>日本建築専門</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 図

日本の住宅空間の変容過程（調査の時間順）

1. 1931年建設
   - 着上も添加
   - 面積増大
   - 材質や形状の変更

2. 1946年増築
   - 新築建物の完成
   - 面積増大
   - 材質や形状の変更

3. 1950年増築
   - 新築建物の完成
   - 面積増大
   - 材質や形状の変更

4. 1960年増築
   - 新築建物の完成
   - 面積増大
   - 材質や形状の変更

### 注

- 例：家屋の使用目的を変更した後の住所（当日の住所）
- 日本建築専門
- 家屋の変更
- 面積の増減
- 家屋の形状
- 家屋の用途
- 家屋の変更

---

- 2774 -
<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>日本統治時期</th>
<th>1960年</th>
<th>1970年</th>
<th>1980年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1920年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1930年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1940年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1950年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

注：此项内容可能与实际内容有所差异。
他の事例は異なり、入居した際、座敷や応接間は客室として使われていたとは思われていない。この事例では、新しく造られた玄関を最も近く、さらに玄関に面している建物とは8畳間が客室として使用されている。主寝室はこの客室の横に、便所であったが、十分な広さではなく、その後、異居が行われたままの部屋となっている。日治時期の座敷は、来客があった場合には来客が泊まるための部屋としても使用した。新居入居後、次男の寝室となり、1990年からは起居室として使われていた。応接間は、長女の寝室として使用されていたが、子供が独立して家を出た後、客室となっている。部屋は十分に他に使用される時代は、他の部屋と比べ、使用頻度の低い部屋であった。

この建物の一帯にある寝室は、建築家の住宅を所有し、隣接に使われたが、現居者入居後から現在までに畳置室として使われている。その理由は、この部屋から廻らへの出入り口が前居住者による改築で無く、玄関の間隔が狭く、位置的には不便な所であったからである。1995年頃には、3人しか居住し手がれておらず、部屋はほとんどが空室であった。しかし、防犯性を向上させるために、縁側を塞ぐ形で夏に使用するための主寝室と、浴室、廻ら間を増築した。

4-7 事例6

事例6では建築当時には、建築家の家族4人、女中が居住しており、玄関、応接間、食堂、客間、8畳間、茶の間、女中室、台所、風呂場、脱衣所、縁側、トイレが2階所に配置されていた。応接間とリノリウム張りの食堂の2階部屋のみが洋室である。

事例5と同様、入居者は1度入れ替わり、1948年に入居した前居住者と入れ替わり、1983年、玄関入口以外は部屋の床材がフローリングに変更されたので、現居者が入居してからはイイスで生活している。入居当初、応接間を食堂、食堂を客室、客間を母親の寝室である父母部、2畳間を主寝室、茶の間を姉の寝室、勉強部屋を長男・次男の寝室、女中室を畳置室として使用している。

日治時期、応接間は停電体として、また建築家の書斎としても使われていた。この応接間は玄関の近くに、12畳半ある一番広い部屋であったことから、現居者は客室として使用し、ピアノが置かれ、普段家族で使用した。この客間のほかに8畳間は、主寝室として使用され、家主はこの部屋で研究や勉強をしていた。また、この部屋の逸仙性を向上させようとしたが、後に復元することもあり、と考えられた。障子と欄間には板に貼り付ける方法をした。

日治時期、食事は茶の間ではなく、食堂でイイス座していた。現居者も、この食堂を食事する場として使用していた。食事は茶の間と違い、食べ物は、日治時期に関しては家族全員がぼんやりとしていた。来客があった時には客室が宿泊していた。現居者家は市に位置し、静かなこの部屋を父母部屋として使う。食事は茶の間と客間は主家の書斎と寝室に変わり、部屋は妻の寝室となった。

1935年には、建築者が主寝室にした子供用の勉強部屋を増築したが、風光がよく通るように、壁面に広い窓を設け、裏庭に出られるように、ガラスの引戸も付けられた。現居者入居後、この勉強部屋は長男・次男の寝室として使用された。子供が家を出たつらは、起居室となり、縁側との間にあったガラス戸が全て取り外され、縁側とこの起居室の一部として使われている。現居者家はこの部屋の増築した時期が居住者だったと思われているが、日本人居住者に対するインタビューで、実際にには日治時期には既に増築されていったことが意味があるとされた。

1996年、長男夫婦と2人の孫がこの家に住む際、寝室が不足し、建築当時の食堂、台所、勝手口と東側のトイレを一室にし、長男夫婦と孫の寝室とした。食堂と廊下の間にガラス戸を設けたことに応じて、寝室とした。この寝室では、夫婦用のダブルベッドと子供用の2段ベッドが設置された。食堂と台所が無くなることと同じに、玄関側の外観に破られるようになった。里に近い起居室の東間に新たに造られた寝室を増築した。この増築により、来客に料理を出す機会が増えただけでなく、勉強部屋であった起居室が客室となった。その後、応接間で前居住者は次第に使用されなくなり、普段使用しない家具や書物などを畳置室になっている。

4-8 事例7

事例7では、建築主とその家族6人が居住していた。建築当時は玄関、書斎、座敷、居間、食堂、勉強部屋、脱衣室、台所、風呂場、縁側、トイレが2階所に配置されていた。居間空間には、書斎や食堂は板の間で、他は畳置きの座敷部屋であった。

この事例においても、入居者が1度入れ替わった。1947年、前居住者が入居した際、床材の変更や、勉強部屋にあった引戸戸と外開き戸を内開き戸にするなどの変更があった。1983年、現居者である家主と家族3人、女中がこの家に入居し、書斎を主家の書斎、畳置室を客室、居間を畳置間、食堂を廻ら間、6畳の部屋を小間室、勉強部屋を畳置室、脱衣室を更衣室、物置を畳置場として使用した。70年脇に、畳置きの部屋が既に変更されていたため、入居してからイイスで生活している。食堂は、板張りで台所の近くにあっこともあり、現在は同じ用途の食堂として使用されている。

日治時期の書斎は、建築家が来客用の応接間としても使っていたが、現居者でこの部屋を書斎として使用し、仕事を打ち合わせなどにここで行った。接客は、座敷であった客室で行った。日治時期、座敷の隣にあった居間は、夜には子供のみの寝室であったが、現居者入居後、客室の隣にある寄席であると、ダブルベッドなどの家具を置ける広さがあったため、主寝室として使用されていた。板の間は、食堂は、現居者もまた用途の食堂として使用されている。建築者が、この建築物の一番奥にある客間を母親の寝室とし、41年以後は別室となった。現在現居者がこの部屋を小間室として使用していった。入居時に既にスペースが不足しており、裏庭に子供用の書斎、起居室、客室の増築をした。庭には花植えを植えたり、和風の池もあり、観るなどの観客が駐車できるままで残された外観が残った。道路の反対側である裏庭に増築をしたことも理由があった。

2017年、妻の母親が入居することとなり、さらに長男が結婚し入居することとなり、里に恵まれたものが多く変わった。まず、日治時期の書斎は母親の寝室となり、母親が家を出てからは、この書斎は普段あまり使用することのない空間となった。そして、長男復帰の畳置室が必要と変更されたため、裏戸に畳置室された起居室の中央に仕切りを作り、起居室と長男夫婦の寝室の二つに分けた。さらに、畳置室を畳置間とし、二つ部屋を畳置室とし、また、ストーリーステージを玄関前に増築した。居住者の一部が畳置室として、畳置室に増築された畳置室は主寝室に変わった。
た。家主姫が使えるように、この主屋の近くにあったトイレを
浴室に改造し、隣接していた建設当初の勉強部屋の押し入れも浴室
の一部にした。
4-9 事例8
建築主の渡辺県が他の建物主より選めであったため、この建物
は1943年に建設された。建設当初、建築主とその家族4人、女中が
居住していた。玄関、内玄関、応接間、書斎、座敷、次の間、茶の
間、女中室、脱衣所、台所、風呂場、トイレが設けられていた。座敷
を次の間の東、南、西側に囲んでいた。応接間、書斎は
板の間で、他の部屋は無敷きであった。この事例では、入居者が2
度入れ替わった。入居した時期は、それぞれ1947年、1954年、1996
年である。そのうち、1954年の入居者により書斎の南側にあった出
窓が取り除かれ、部屋が増築されたことが分かっている。
1996年、現居者である夫婦と子供2人が入居した。入居時、既
に敷地も建物も二戸分に分けられており、西南側であった次の間、
風呂場、脱衣所、トイレの変更は現地での調査ができないに至った。
現居者は応接間を客室、書斎を長女のの寝室、55年に増築された部
屋を長女のの寝室、座敷を女房用の書房兼工作室、茶の間を会議室、女
中室を浴室として使用している。入居時に既に部屋数が不足したた
め、裏庭に主居室、浴室、客室を増築した。また、玄関の二段
性が高い内開き戸に替えた。玄関の戸は日本人居住者から提供され
た建築当初の素材により、日治時期には、引き戸であったと確認で
きた。また、玄関のタイル張りの床材も日治時期のままであったこ
とも分かった。張敷き部屋の床材が既にフローリングに変更された
のであり、入居してからはインテリアで生活している。しかし、日式
住宅に居住しているという気概から、応接間であったり客室から出入
りできる張敷きの和室を新たに増築した。来客や家族と一緒に茶
を飲む場であるこの和室だけは、座卓、座布団を使い、墨に床座を
している。
日治時期の応接間は、玄関の隣にあるという理由から客室として
使用しており、テレビなどが置かれている。また、応接間と書斎の
間には引き戸があったが、現在はこの書斎を成人の男のの寝室とし
て使用しているため、取り外され壁になっている。現居者は、この
書斎が板の間に張敷きの間の隣接戸コンとなっているのは、前居住者
より改造だったと想像していたが、実際には、日治時期に既に洋室であっ
たことが日本人居住者に対するインタビューによって分かりました。
座敷では、現居者夫婦が、木を用い日本語の本を翻訳する
など仕事を行い、広々とresolutionであることで、書房兼工作室として
改造した。南側にあった張敷きも完全にこの書房兼工作室一部に改造
された。この事例では、現居者が入居した際、既に風呂場とトイレ
がなくなっていたため、建設当初の内中室をシャワールーム・便器・
洗面を1つにしたタイル張りの浴室に改造した。
5 青田町における居住状況の考察
青田町の日式住宅は約80年前に建設され、それぞれの住み手に
よって増改築を行いながら住み続けられた。このような背景を持つ
建物を詳細に調査することによって、以下に述べる事柄と共通性が
明らかとなった。
5-1 座敷・広間から客室・次の間・居間から主席屋への転用
日治時期には、一室一用で使用された部屋は少なかったが、終
戦後、台湾満州居住者が住むようになり、次第に各部屋の用途が決
められるようになった。居住時期によって部屋の使い方が変わった
こともあつたが、玄関に入って正面に部屋がある事例（5戸）につい
ては、現居住者入居後、それらの部屋が客室として使われているこ
との多い（事例3、4.5.7）。それらの5戸の客室のうち3戸では建設当
初座敷であった。現居住者は日式住宅に入居する前に四合院や三合
院などの建物に住んだ経験があり、それぞれの建物では出入り口を入
すと客室となる。従って、台湾満州にとっては、事例3、4.5.7の
ように例は住居性が高かったと考えられる。青田町の日式住宅の
座敷は、客室として使用できる十分な広さや、テレビ、電器を置く
ことのできる床の間や高い棚を有することもあり、客室として利用
されてきた。
また、玄関を入って正面に部屋がない場合、または座敷が玄関
の近くに配置されていない場合（3戸）においては、玄関の近くにある
応接間が客室として使用されている（事例1、6.8）。これらのことか
ら言えることは、台湾日の居住者にとって、四合院や三合院のように
出入り口を入った正面に客室があることが重要で、正面に妥当な部
屋が無かった事例では、玄関に近く部屋である応接間が使われた。
さらに、台湾の伝統的住居（11）を鑑みると、出入り口を入ってす
ぐに客室があることが一般的であるので、現在客室として使われて
いる部屋と、玄関を合わせて客室とするのも考えられる。しかし、
実際にはどの事例でもそうではなくない。それは、日本に居住し
た経験がある居住者もいたために、その様式について知識を持って
おり、玄関様式を意識的に残したと考えられる。
一方、客室の位置に影響を受ける部屋としては、夫婦間の主
席屋である。主席屋は客室に次いで重要な部屋であり、採光や
通風ともその他の部屋より重視されている。台湾の住宅の主席屋は常に
客室の隣に計画されている（11）事実、従って、時期による変化があった
が、客室と主席屋は隣接、あるいは近くにある次の間や居住者が主席屋
として使われた事例が多い（事例4、5.6.7）。主席屋として使われる部
屋の決定は、ダブルペアを置く必要があるということもあるが、客室の位置に影響を受けるものとも言える。
5-2 必要最低限の配置・建物と床材の変更
戦後、治安が悪化し、青田町の日式住宅においても、防犯のため
に建物が変更された事例が多い。さらに玄関の建物において、内
側の玄関から逃れがたいという考えのもと、または納戸の影響もあ
る。日本人の居住者へのインタビュー調査により、建物当初の外開き
戸や引き戸が内開き戸に変更された事例が、5戸もあったことが分
かった。一方、現居住者へのインタビューにより、元の形を復
元できるよう、建物を張り替えたり、板で目隠しをするという工夫
をしている事例があった。
玄関の戸は、引き戸を内開き戸に替え、外側に鉄製開き戸に付け
加えた（事例3）。戸元が、事例8の様に引き戸で何重もの鍵を持ち
防犯性が高い内開き戸に替えた事例がある。新たな玄関を造り替え
た事例5においても、内開き戸に、外側に鉄製開き戸に付けた。内
開き戸としたのは、玄関が狭い家の狭さを含めた戸口にあつたな
ことと、防犯上の理由からドアを二重にする必要性があったためで
ある。室内戸は、プライバシーを確保のため、内開き戸に変更した。
実際、台湾の住宅は、部屋のドアを外開き戸にすることは殆どない。
というのは、居間は客室や書斎などの公的な空間と隣接して配置さ
(3) 台湾弘法である居住者は、増築することが必要となった場合、建物の外観を保つという意識があったと言える。また、その別棟の建て方は、台湾の伝統的な建築様式に大きな影響を受けていた。

青田街の日式住宅は、日本人建築家が台湾に残したようであった建物であった。終戦後、新たな居住者である台湾弘法者が住むことを希望し、日本の伝統的な建物様式を保てるように再建された。それらの事例においては数図の上に取り組まれ、就業したりする習慣が残ったようである。

5-3 増築の仕方

台湾弘法が最初には、住居の用途を変えるために、大規模な増築をすることで、住居をより良いものに変えることを目的とした。それらの仕方は、住居の機能をより良くするという観点から、住居の構造をより良いものとするため、増築することが必要となったとされている。特に、住居の外観を保つことが求められたとされる。これらの仕方の詳細については、次の項で述べる。

一方、道の反対側にある裏庭に増築する事例は少なくない（事例 6,7,8）。これらでは、裏庭は十分な空間があるという理由と、日式住宅の外観を維持しようとしたいという理由があった。裏庭に増築した経験があるが、裏庭に増築を計画していた事例 5,7 においては、工事し、住居の内部と外部の関係を再構成していること、さらに当時普遍的な住居では、住居を取り入れることに努める必要がある。増築した建物の外観を保つために、増築を考慮した経験のないことでもある。また、住居

6 結論

本研究では、日治時期の住居を対象に、居住状況のインタビュー調査を行った。さらに、現存しているこれらの建物の実態調査と現居住者による使


参考文献

(1) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(2) 鎌田：他：日本統治時期における指導関係の建物

(3) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(4) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の建物

(5) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の建物

(6) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(7) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の建物

(8) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(9) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(10) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(11) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(12) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(13) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(14) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(15) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(16) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(17) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(18) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(19) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(20) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(21) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(22) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(23) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(24) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(25) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(26) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(27) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(28) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(29) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と

(30) 鎌田：他：日本統治時期における台日住宅の住居状況と